不登校支援への視点

山 口 直 子

近畿大学臨床心理センター・箕面市教育センター

要 約

1992 年に文部省により出された、不登校は「どの子にも起こる」という見解は、表面的に捉えると、不登校に内包される問題を薄めたり見えづらしたりする＝拡散してしまう可能性もあるのではないだろうか。このような問題意識を含めて不登校について考えるきっかけとなった筆者の初期の不登校臨床の経験と、不登校支援を行うにあたって大切であると思われるいくつかの視点についての私見を述べ、不登校は「子どもの成長過程におけるつまずき」であるという捉え方を提起した。

Key words：不登校支援、不登校臨床、成長過程

1．はじめに

不登校を「どの子にも起こる」(1992, 文部省) とした見解は、それまでの特定の性格傾向の子に起こるという見解からの一大転換をもたらし、特別視や深刻化を防ぐ働きをする一方で、もしかすると問題を軽視することにつながり、そこに内包される問題を薄めたり見えづらくしたりする＝拡散してしまう可能性もあるのではないだろうか。そうではなく、むしろ就学中であればどの子どももそのリスクを抱えているという危機管理意識を持ちつつ、不登校における理解や共通性を踏まえることの必要性や、更に各個人の抱える問題の独自性をしっかりと捉えた支援の必要性を示唆しているのではないかと思われる。

以上のような問題意識を含めて不登校について考えるきっかけとなった筆者の初期の不登校臨床の経験と、現在の臨床経験に取り組む中で得た、不登校支援を行うにあたって大切であると思われるいくつかの視点についての私見を述べてみたい。

2．不登校はどの子にも起こる

不登校とは、登校しない“現象”を指す言葉であるに過ぎず、「独立した疾患概念ではなく、さまざまな原因によって生じてくる」(齋藤, 2006) のであり、それぞれに違った背景や経緯があると考えられる。

我が国では、70年代より学校を長期欠席する児童生徒の数が増え続けている。経済の高度成長に伴い中流階級層が国民の多数を占め、教育の水準が高くなるにつれて社会全体に高学歴志向が広がり、先生や親や子どもたちにかかる学習への圧力は大きくなった。その影響は測り知れず、長欠児童生徒の増加という形で表れているという見方もできるのではないだろうか。

92年に文部省が「登校拒否はどの子にも起こる」との見解を表明するに至るほど、不登校はある種ありふれた現象となった。些細な躓きから不登校状態に陥り一見葛藤が見えづらい、いわゆる“明るい不登校”や、漠然とした学習意欲の低下や漫然とした不全感を持った長欠児童生徒が多くなり、不登校が言わば拡散していくような形で広がりつつあると言える。

不登校を呈する子どもの数が増加するに伴い、各種のフリースクールや単位制高校と言った比較的枠組みの緩い“居場所”も増えている。非審判的で非侵入的な安心して過ごせる居場所があることで家にひきこもらずに社会に参加できるきっかけを得ることができる意味は測り知れないほど大きい。ただ、このように社会の受け入れや許容度が高まったことにより、不登校状態に対する葛藤が軽減されたことが、不登校の拡散につながっていると見ることもできるかもしれない。

不登校を“悪”と捉えて是が非でも学校に連れて行くという考え方は、やみくもに葛藤を助長し苦しみを増すだけで問題解決につながらないが、一方で葛藤を取り払って子どもが成長する機会を逸してしまうという危険性も避けなければならない。不登校の解決には時間やエネルギーを要することから、ともすれば安易に「登校刺激をしない」という大義名分のもとに単なる放任に陥ってしまいやすいことも考えられる。今一度、どの子にも起こるという言葉が示す意味を掘り下げ、不登校についての認識や不登校支援を行う際の視点について検討する必要があるのではないだろうか。

3．不登校の子どもとの最初の出会い

学生の頃、各市町村主宰のメンタルフレンド活動が盛んになる中で、筆者もボランティアとしてその活動に参加することになった。実際に不登校の子どもに出会い、心を通わせる機会を得られたことが、不登校について考えるきっかけとなった。受け持ったのは中学生の女の子。当時は「子どもが元気になるために、家の中だけではなく一緒に様々な場所に出かける」という大きな枠組みの中で、一緒に自転車に乗っていろいろな場所に出かけ、まさに友達のように楽しい交流を持つことができた。学校に行けていないことを除けば、何ら問題があるようには思えず、屈託ない少女らしい笑顔を見せ憧れている歌手について語る彼女の姿から、当初抱いていた不登校の子どもたちに対するイメージは大きく修正されることを余儀なくされた。交換日記を通じて感じられたのは、感受性が豊かで、繊細な心の持ち主ゆえに傷つくことも多くあり、表面的には見えないところで苦しんでいるということだった。転居

により中学校を変わったことをきっかけに学校での自分の居場所を見出せなくなったことから、周囲の目が気になってしまうという大きな苦悩を抱えるようになったが明るく振る舞い続け、学校に行けなくなるまでその苦悩は誰にも気付かれることはなかった。悩みぬいた末に中学校の卒業式に参加し、進路に関して大きな決断をした。全寮制の高校に進学することを決め「学校に行けなくても、しっかり生きていける。」と誇らしげに語った、彼女の言葉が今でも強く印象に残っている。

学生時代にはもう一人中学生の女の子にメンタルフレンドとして関わった。学業やクラブ活動、人間関係までもの全てを完璧にこなそうとした末の「息切れ」が生じているようだった。限界を超える寸前の自分を守るために家にこもり、好きな絵や漫画を描くことに没頭していた彼女が、紙面に織りなすストーリーに感心するばかりだった。内面の作業に深まりは感じられるものの、外面の動きが見られず長期化の一途を辿る中、「このような関わりを続けていていいのだろうか。もっと他にできることはないのか。」という迷いや焦りと「これが今の彼女には必要なんだ。」という確信の間で筆者が揺れることもしばしばあった。しかし、彼女は作品の創作を通じて自らのアイデンティティを探る長く苦しい道程をしっかりと歩み、また、家族も不登校を通じて彼女の苦しみに向き合い理解するに至った。中学時代を乗り越えた彼女は、高校進学にあたって通信制高校に通うことを決めた。

個別の関わり以外に、不登校の子どもたちを対象にするキャンプ活動に参加するという経験もした。数日間、自然の中で生活を共にする時、その子が不登校であるかどうかというという認識は一切必要なく、力を合わせてサバイバル生活を切り抜ける仲間であるというように感じられた。その後、目覚ましい成長を見せる子どもたちがいた。

公立の教育相談機関に勤めることになり、来所による相談以外にも訪問相談や適応指導教室のスタッフとして不登校の子どもたちと日々向き合うことになった現在、学生時代のメンタルフレンド活動やキャンプ活動における出会いを通じての経験が礎となり支えになっているし、これからもなり続けるのだろうと思う。

4．不登校支援への視点

1）背景にあるもの

不登校の問題を考える時、その背景に多種多様な要因があることを踏まえる必要があると思われる。いたずらに「なぜ」を追求し、原因を明らかにしようと、いわゆる“悪者探し”のためにエネルギーを消耗することは徒労に終わるばかりではなく、無用な傷つきをうむことにもなりかねない。

しかし、その背景に共通する要因や不登校に伴う心理的な痛みや葛藤を理解することは、適切な対応を行うために必要である。

不登校の背景にあると考えられる要因を以下に列挙する。

①文化・社会的要因…社会全体に根付いた高学歴志向により、学習をめぐって大きな圧力が存在している。勉強ができるかできないか、二元論的な思考から逃れられず苦しみ葛藤する親や子どもたち。一方で、高度な情報化により、過剰なまでの情報やモノが人間関係を介さずに手に入る環境において、家の中で他者と関わらずに過ごすことができるというように、「逃げ場」や「すき間」がいくつも存在している。

②家族の要因…核家族化が急速に進み、家庭が問題を内に抱え込みやすい構造が出来ている。情報化による価値観の氾濫により、子育てに迷いや不安がつきまとう中、養育態度が極端になりやすいという問題（過干渉か放任かなど）が生じ、家族内の人間関係の不和や葛藤など、家族の抱える問題が複雑化している。家の中で家族とのやりとりにエネルギーを消耗し、本来期待される回復機能が望めない場合も少なくない。学校へ子どもを元気な状態で外へ送り出す力が弱まるなど、家庭の養育機能が低下してきている。

③子どもの要因…発達の偏り（発達障害）における二次障害が生じたり、性格傾向として敏感さや固さ、傷つきやすさなど脆弱傾向があると、心のエネルギーを消耗しやすい。上記のような家族の要因も伴った場合、消耗したエネルギーの家庭内での回復が難しくなる。

④学校の要因…「つめこみ」から「ゆとり」へのシフトチェンジから一転して再び「ゆとり」の見直しへと、現場は日々その対応に追われている。教師の権威が弱まり、保護者の態度は非協力的である一方、学校に求める要求は高まっている。特別支援教育が義務化され、その対応にまで追われるなど、学校の制度疲労が露呈化している。

2）長期化の問題

日々こなすべきノルマに追われる学校のめまぐるしさからひとたび離れると、再び戻るのはたやすいことではない。一度、学校に毎日通うという枠が外れると、元の状態に戻るということは容易ではなく、学校に完全に行かない状態になった場合の多くは長期化しやすいことを踏まえ、初期段階から適切な介入を行うことが望ましいと考える。多くの場合たどるであろう共通した経過をふまえる必要性があると思われる。

齋藤（2002）は、「不登校経過の諸段階」として以下のような段階を挙げている。

不登校準備段階 ⇒ 不登校開始段階 ⇒ ひきこもり段階 ⇒ 社会との再会段階

全欠状態になる前段階である「不登校準備段階」は、ほとんどそれと認知することは難しいが、本人の示す変化から苦しみや悩みに気づき適切に介入するために、普段からの教師や

親と子どもとのコミュニケーションが大切になってくる。

欠席という行動化が表れる「不登校開始段階」には、激しい葛藤の顕在化による不安定さが際立ち、身体化という形を取ることも多い。本人への強いアプローチは混乱を招くことになるため、慎重を要する。たいていの保護者は強い不安のため子どもや自らを責め、不安のために本人を追いつめるような言動を取ったりすることが多いため、主に保護者が子どもに適切な対応を行えるような支援が必要である。

退行と顕著な外界の回避が出る「ひきこもり段階」で徐々に安定と回復を取り戻し、個々のケースが抱える課題に取り組むため一定の期間を有するという覚悟と展望を持って支援に取り組む必要がある。ひきこもりのネガティブな面にとらわれすぎないように、本人や家族が課題に向き合うための時間というポジティブな面を捉える。また、“そっとしておいてほしい”と言う気持ちの一方で“見捨てられるのは嫌だ”という気持ちもあり、学校との一定の距離を保ちながらの関係の保持が重要である。

こうして「ひきこもり段階」から、いつからかそっと「社会との再会段階」に入る。この段階に入ったことを“敏感に感知することは治療・援助の成否を左右する勘所となる”（齋藤，2006）のであり、安易な長期化を避けて、可能な範囲で外部との接触を持ちつながれるようコーディネートするなど、時機を得た働きかけを行うことが必要である。

3）学校復帰について

不登校に付随する様々な不利益（教育の機会を失う、集団生活の中で得られることが経験できない）に心を奪われ、何とか登校できる状態に持っていきたいと願い、学校復帰を解決と捉えて目的に据えるというのは自然なことかもしれない。

しかし、学校への復帰は、それ自体を目的に設定してしまうと「授業に入っていきやすいように遅れを取らないような勉強をさせよう」などと考えて、本人が抱える劣等感や学習への抵抗感をむやみに刺激してしまい、退行や防衛を助長するなど、逆効果を招くような対応をしてしまいがちであるように思われる。「学校復帰」ということに囚われすぎると本質を見誤りやすく、いわゆる視野狭窄が起こりやすいように思われる。本人や家族がしっかりと課題に取り組み成長する過程を経た結果として学校に復帰することは勿論ある。ただ、結果としてそうなることはあっても、問題解決の形は様々なのではないだろうか。「学校復帰」を学校に毎日通い授業に参加するという狭い枠組みではなく、「人や社会とのつながりを本人なりに広げ、持てる力を発揮できるようになる」というように柔軟な枠組みで捉えて臨む方が、より治療的ではないかと考える。

4）子どものよさをいかに育むか

子どもと直接関わり、その関わりを通じて良好な関係を築き、その子どものよさを大切に

育む手伝いができることは、不登校臨床において臨床家が取り組むべき最も大切な仕事の一つであると思われる。子どもの健康な部分を育む、リソース〈資源〉（＝得意なこと、好きなこと、その子のよき資質）を見つけて広げたり深めたりするという視点を持ち、子どもに出会うこと、一緒に何かをするのを心から楽しむこと、あいさつや何気ない会話を楽しむことが子どもへの勇気づけにつながるのではないかと思う。このようにして人との関わりをよきものであると体験することが、心の糧となり社会や人とつながる大きな原動力となるのではないだろうか。

子どもとの出会い方は相談室やプレイルームでの一対一の関わりに限らない。訪問という形でその子どもの生活スペースに入らせてもらい、よりパーソナルな部分を共有しながら、身近な存在として支えになるという関わり方もある。

また、適応指導教室で小集団に対する働きかけを行うという関わり方もある。侵入や強制の少ない守られた空間は居場所としての機能を果たし、その中で子ども同士の関わりが時に目を見張るほどの成長促進をもたらすなど、集団のダイナミズムを感じることができる。

様々な役割の大人が関わり、社会生活や次のステップのつなぎ役として機能し、子ども同士の育ち合いを支える中で、社会的自立への準備が整っていくことが望まれる。

5．さいごに

不登校は「子どもの成長過程におけるつまずき」であるという捉え方を、関わる人たちで共有しながら、ネットワークの中でその成長を支えることが大切ではないだろうか。不登校の問題に取り組むことは、その子どもの成長とともに、関わる大人たちの心の成長にもつながるという育ち合いの視点を大切にしたい。

一口に不登校と言っても、そこに至る経過やたどる道筋はそれぞれに違い、そこに個性が表れている。様々なケースの共通性や普遍性を踏まえながら、各ケースの持つ固有性にもしっかりと目を向けて不登校支援に取り組んでいきたい。

今後は、これまで経験したケースをより詳細に振り返り、検討するということにも取り組みたいと考えている。

文　献

学校不適応対策調査研究協力者協議会（1992）：登校拒否（不登校）問題について；児童生徒の「心の居場所づくりを目指して（文部省中学校課内生徒指導研究会編）学校経営5月号臨時増刊，pp45-109．第一法規

小林正幸（2003）：不登校児の理解と援助　問題解決と予防のコツ．金剛出版

齋藤万比古（2002）：不登校．（山崎晃資ほか編）現代児童青年精神医学，pp.343-354．永井書店

齋藤万比古（2006）：不登校の児童・思春期精神医学．金剛出版

菅野純（2008）：不登校　予防と支援　Q＆A 70. 明治図書出版
滝川一廣（2005）：不登校理解の基礎. 臨床心理学（特集　不登校）, pp15-21. 金剛出版
文部科学省（2003）：今後の不登校への対応の在り方について（報告）. 文部科学省ホームページ